

---

# とある窒素の置き去り（チャイルドエラー）

城鬼シオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

とある室素の置き去り（チャイルドエラー）

### 【Nコード】

N3541V

### 【作者名】

城鬼シオ

### 【あらすじ】

暗闇の五月計画。この計画の被験者の中で、一人の少年がいた。彼はこの計画で生み出された能力を使って、上条当麻たちと共に魔術師や超能力者と戦っていく。夏休みが始まるとき、彼の非日常な日々が始まる。

ヒロイン予定キャラは絹旗最愛と黑夜海鳥の二人です。

超スローペースになると思いますが、宜しく願います。

## 第零話（前書き）

他の作品更新していないし、他に書いた禁書まったく更新していないじゃないかってことは分かっています。

でもさっき思いついたものを書いてみたいんだ。

他の作品も絶対に完結させる。それまでは失踪なんてしない。

## 第零話

…なあ先生。

「どうしたんだい？　もう僕が手を出すようなことは無いと思うけどね？」

そうじゃない。最後に一つ…いや、二つ、我が俤を聞いてくれないか？

「内容にもよるけどね。でもできるだけのことはやるよ」

ありがとう先生。じゃあまず一つ目、学校に通わせてくれないか？

「今年で確か高校生だったね？　それくらいなら問題ないよ。君の実力上それなりのところに行けると思うね」

ありがとう。二つ目、名前って変えられるか？

「できないことは無いけどね？　でも色々手続きとか、ＩＤカードの再発行とかが面倒だね？　そもそも正当な理由がないと改名はできないんだね」

…あの忌々しい記憶を忘れたいだけだ。そもそもあの親がつけた名前は気に入らない。

「…まあ、何とかなるね。事実、置き去りの改名は認められてるかだね」

本当に、何から何までありがとう、先生。

「僕はただ、患者に必要なものをそろえるならどんな事でもするからね？」

先生らしいな、本当に。

「それで、話は戻るけど何処の高校に行きたいんだい？」

そうだな…。できれば毎日バカやって楽しい所がいい。

「それならこの前入院した少年がちょうどいい学校に入学するらしいね？ 彼は寮生活らしいし、学校について色々聞いてみたらどうだい？」

そうだな。後で聞いてくるよ。

「ところで新しい名前は考えてるのかい？」

そうだな…、じゃあ…。

これは、未だ己の運命に気がつかない少年の物語。

時は受験が終わり、高校の準備期間である春休み。

忌々しき記憶を持つ少年と不幸な少年が出会ったとき、物語は幕を開ける。

## 第零話（後書き）

他の作品を書くにあたって、結構更新が遅れるかもしれませんが。

ですが、現在停止している無限掌も夏休み終了までには更新します。

もう絶対に失踪しない。



## オリキャラ設定（前書き）

おかしいところはどんどん言ってください。

## オリキャラ設定

名前、本道 惟数 （もとみち ただかず）

能力、「エアリアルブースト窒素推進」

詳細、上条と同じ高校に通う能力者。高能力者。

上条と同じクラスで土御門や青ピ、上条と共にバカやっている。

制服以外だと、白いポロシャツの上に黒の皮のジャケット、そしてジーンズを着用する。

モノクロが好きなので結局服は白と黒の服になる。

ノリがよくて上条を弄ることが多いが面倒見はよく、食費が危うい上条に飯をおごってやつたり、食料を分けてやることもしばしば。ごくまれに、上条に勉強を教えることも。

一見まともに見えるが、大のゲーム好きで新作が出るとその日は学校を休んでやりこむ。

必ず同じものを二つ買って、プレイ用と観賞用とで分けていたり、青ピや土御門とは別の方向に変人。好きなシリーズはポケモン。（第一〜第四世代までプレイ時間カンスト 大会優勝経験あり 現在第五世代プレイ中）

戦闘時は「窒素推進」を生かして前線で戦う。

また、暗闇の五月計画の被験者。

口調、通常時は上条のように特徴が無いが、能力使用時に精神が高

ぶると、絹旗や黒夜と同じく口調が一方通行の口調になる。

例、「ったく当麻、お前何回此処の過程で躓いてんだよ？」

「性格一致HBCDV耐熱ドーラー、3徹でようやく来た……  
…ってめざパ悪だど！？ クソ…やり直した…」

「安心していいんだぜエ？ 手エ抜かずに本気で行くからよオ  
！」

能力詳細、「窒素推進」（エアリアルブースト）

暗闇の五月計画によって生み出された能力。レベル4。

空気中の窒素を操ることができる。

絹旗と黒夜との大きな違いは「動き」に特化されていること。

一方通行の「ベクトル操作による物体の動き」を擬似的に再現し、  
対象物を弾丸のように飛ばしたり、自身が滑空することも可能。

ただし、あくまで窒素を使うので血流操作やらはできない。

自身の加速は生命の危機にさらされるが、自身に窒素の層を作ること  
でGを軽減することができる。

対象にしたもののしか速さと向きを変えることができないのが弱点で、  
不意打ちに圧倒的に弱い。同時に効果を及ぼせるのは最大6つまで。  
数が多くなるにつれ、精度が落ちていく。

暗黒の五月計画において、「一方通行の機動性」を植えたことで  
発現したテストモデルであるが故、思考パターンの一部を植えつけ  
られた関係上、能力使用時は一方通行の思考や言動に本来の人格  
も引き摺られてしまう。

## 第一話（前書き）

今日はオープンキャンパスなので、もう寝ちゃいます。

## 第一話

学園都市。総人口230万人で、そのうちの八割が学生であるという少し変わった都市。

しかし、此処の学生の大半は普通ではない力      いわば超能力を持っている。

記憶術、暗記術と言った名目でそんな研究や開発が行われている、そんな場所だ。

そしてとある寮に住む一人の男子高校生の「もともち ただかず本道惟数」も、その能力開発を受けた一人であった。

「さて、そろそろだな」

俺は読んでいた新聞紙を置いて、椅子から立ち上がって背伸びをする。

パキポキツ、っと子気味いい音が聞こえてくることから相当な時間、新聞を読み込んでいたようだ。

「どうせ当麻はまた金が無いとか言ってるだろうし、昨日のあまり物でも持っていったらやるか」

時計はすでに八時を少し回ったくらい。これなら奴も起きているだろう。そんな考えをしながら冷蔵庫を開ける。

「……ん？」

惟数が冷蔵庫を開けて違和感を覚える。むしろ違和感しか覚ええない。

（冷蔵庫の中ってこんなに生温かったか？）

そんなわけが無い。昨日使ったときはしっかり使えたはず。そのときはまだ冷たかった。

「どうなってるんだ？」

原因を探るため、軽く思考の海に飛び込んでみる。

この暑さでぶっ壊れた？ 否、学園都市の進んだ科学力を舐めてはいけない。てか最近新しくしたばかりだ。

使い方が荒かった？ 否、その程度で学園都市製のものは壊れない。

そういえばさつきから電化製品がうんともすんとも言わない。普通、こないっぺんに壊れることは無い。あるとすれば、

「…停電？」

それくらいしか考え付かない。しかしそれだけじゃ普通は壊れない。冷蔵庫の中身が逝ってしまうくらいだろう。

「そっぴや昨日、でっかい雷が落ちたような音がしたような…」

昨日の天候は晴れ。むしろ快晴。そんな中で雷なんて起こらない。

そうなると高レベルの発電能力者が喧嘩でもしたのだろうか？ どちらにせよ、被害を受けているのは俺らである。

「……不幸だド畜生」

あいつの口癖が移ったようだ。だが、この状況下でそれ以外に何を言えと？

「……まあ、飯は途中のコンビニでどうにかするか……」

（あいつにも奢ってやるか……。激しくメンドクサイが）

玄関にあるブレーカーをあげて、靴を履き、鞆を掴んで外に出る。

鍵を掛けるのは忘れない。これ以上の不幸はお断りだ。

『……………！？……………！！』

『……………！！』

（ウッセーな……。土御門が妹と痴話喧嘩でもしたか？）

土御門とは、俺の二つ隣に住んでいるまあなんつうか、シスコンである。

今更だが俺は寮暮らしをしている。先生とあいつの勧めで此处にしたが、悪くない。

何だかんだで皆とワイワイ騒げるのは面白い。

…話が逸れた。とりあえず、土御門はスルーしてあいつの様子を見に行くか。

（つつても隣だけどな）

隣の部屋のドアノブをひねる。鍵は掛かってないようだ。無用心なやつめ。

ま、鍵が開いてるなら手間が省けていいか。

「おい当麻、そろそろ行かないと補習に「絶対に許さないんだよ！」「ちよつと待て！ 今のは不可抗力で『ガブツ！』ぎゃああああああ！ 不幸だあああああああ！」……ってオイ」

何だ何だよ何ですか、この状況。目の前に見える状況を冷静に判断できないぞ。

とりあえず、目の前には今通っている高校を勧めてくれ、俺の親友つつつてもいい奴。その名を上条当麻。

そしてもう一人。明らかに日本人でなく、小柄な少女。

うん。これだけならまだいいんだ。問題はその格好。

どう見ても全裸です。本当にありがとうございしました。



「た、惟数か！？ 助けてくれ！」

「……あーなんだ。仲睦まじいご様子ですね。俺はこのまま退散させてもらっぜ」

済まない当麻。もう俺はお前をロリコンとしか見られない！！

「ご、誤解だ惟数『ガブガブ』ぎゃあああああああああ！！不幸だあああああああ！！！」

その後しばらく当麻の悲鳴が続き、さすがに可愛いそうなので助けてあげました。

## 第二話（前書き）

学校の補習と塾で忙しすぎる…。

高二でもこんなに忙しいのね…。

## 第二話

「……で、こいつはどういうことだ？」

「上条さんが聞きたいですよ……」

「じゃあ何で全裸の少女がいたのか説明してもらいましょうかねえ、当麻君？」

「だからあれは事故なんだあああああ！」

今現在、説教なう。いやあ、まさか当麻にそんな趣味があるとは思わなかった。

「嫌がる少女を部屋に連れてきて必死の抵抗をされた挙句、その現場を友人に発見されたからって、そんなにあせんなよ。そういう性癖なんだよな？」

「だから違うつて何度言ったら……！」

「大丈夫だ、俺はそんな当麻を応援している」

「だったらさり気なく後ろに下がって逃げないで！ 畜生不幸だああああああ！」

さて、ここらで当麻をおちよくるのはやめようか。で、あの子  
インデックス  
禁書目録だっけ？ あの子は当麻に壊された服（修道服？）を  
安全ピンで直してる。

当麻曰く、右手で触れたらぶっ壊れたそうなの。

「つーことは、その服は異能の力で作られてたのか？」

「多分な…」

修道服ってことはシスターさんってことだよな。この近くに教会とかあったっけか？

「…で、この子はどうするんだ？」

「そうだな…、とりあえず『やつと直ったんだよ！ 全部あなたのせいなんだよ！』ってぎゃあああああああ！ さっきから本当に不幸だあああああああ！」

「だあああああ！ いきなり噛み付こうとするな！ 話が続かないだろうがあああああああ！」

俺らが話している間にインデックスが服を直し終えたらしい。そして流れるような動作で当麻の頭に噛み付く攻撃。当麻はひるんで動けない！ ってどうでもいいわ！

（なんでもかんでもポケンで考える癖はどうにかしねえとな…）

そんなことを考えつつ、当麻を救出することにした。

さて、現在インデックスの話を聞いてる訳だが、結構ヘビーな内容だぞオイ。

簡単にまとめて見ようと思う。

- ・ 彼女は「必要悪の教会」ネセサリウスの魔術師でありシスターである。
- ・ 完全記憶能力がある。
- ・ 一年間ほどの記憶しかない。
- ・ 同じ必要悪の教会の仲間から追われている（はいココ重要！）
- ・ 十万三千冊の魔道書をもっている。

ま、こんなところか。

「理由はよく分かんが、ヒデエ仲間もいたもんだ」

さて、どうしたもんか。追われている身であるならば、なおさらどこでかくまってもらう必要があるが……。

「じゃあ、そろそろ私はいくね」

「ちょっとまてや」

こつちが考えている間に此処から去ろうとすんな！

「追われているのに勝手にどこかに行こうとすんな！　つかまったらどうする！？」

「私の服には魔力があるからね。敵はこれをサーチしているみたいだから何処にいても変わらないよ。とうまただかずも部屋ごと爆発されたくないでしょ？」

確かにその通りだが……。

「でもよ、それってすごくマズいんじゃないか？」

「そうだね。けど大丈夫。教会までいけば匿ってくれるし、歩く教会だってあるしね」

「おい待てって」

当麻がインデックスを呼び止めようとする。当麻は正義感が強いし、困っている人を見ると放って置けない性格だ。おかげで貧乏くじ引いたり、自身の不幸を招いているわけだが。

ま、それがこいつのいいところだ。

「ありがとう。心配してくれて」

確かに本気で当麻は心配している。てか、そうやって思ってるんならおとなしくしていてくれよ。

「けどいいんだよ。これ以上私がここにいと、とうまとただかずに迷惑をかけちゃうから」

「おい、別にそんなことは……」

「じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

「っ!？」

その声が、あまりにも寂しげで。

その目が、己の運命を悟っているようで。

その目は俺が良く知っている目で。

「じゃあね。とうまのご飯おいしかったよ。ただかずも本気で私の心配してくれてありがとう。二人ともいい人だね」

彼女が十字の印を切って、パタパタと部屋を出て行く。

「……………クソが」

思わず悪態をつく。インデックスにキレているわけじゃない。

ただ、この何故かもややする感覚が気に入らないだけだ。

「……………なあ」

「どうした、当麻」

「とてもいいづらいんでせうが……………、もうほぼ遅刻確定だぞ」

……………オイコラ。

「何？ 何であの後にそんな発言ができるンですかア！？」

「まてまてまて！ 上条さんが悪かった！ だから部屋の中で能力使わないで！」

当麻はこんなに空気読めなかったんですか！？ 幻滅したわこん畜生！

「……………まあいい。さっさと向かうぞ」

「ゴメンな。惟数まで遅刻にさせちまって」

「何言ってるんだ？ 遅刻するのはお前だけだぞ」



は？って顔してるな。ま、当然だが。

「えーと、本道さん？ あなたは何でまるで飛び降りるような体勢なのでせうか？」

「決まってるじゃないか」

それを聞いてから、手すりから飛ぶ。一瞬だけ、重力に従って下に落ちる。

ただ、それは一瞬だけ。落下感から浮遊感に切り替わる。そしてその浮遊感も直ぐに終わる。

「じゃ、おさきに失礼するぜい」

「おいちよつと待て！」

その言葉は聴きつけられない。当麻の言葉を聞き終えた瞬間、一気に加速する。

イメージするなら、俺の脚からジェット噴射させて飛行してるように、俺は飛んだ。

「じゃ、また学校で会おうぜエ！」

「待ってくれ！ 畜生！ 本当に不幸だああああああああああああああああああああ！」

当麻の声なんて聞こえない。聞こえなかった。俺のログには何も無

か  
っ  
た  
！

## 第二話（後書き）

眠い…。

### 第三話（前書き）

ようやく美琴と出会いました。

レベル5の序列の意味ってこれであってるよね？

### 第三話

「はい。それじゃ先生プリント作ってきたのでまず配るですー。それを見ながら今日は補習の授業を進めますよー?」

能力で滑空してきた俺は余裕で到着したが、当麻はぎりぎりだった。それにしてももう一学期たつけど、未だにありえないと思う。

我がクラス一年七組の担任、月詠小萌先生は身長135cmというどっからどう見ても小学生にしか見えない人なのだ。学園都市の七不思議にすら指定されてる。

ちなみに俺は補習を受けていない。小萌先生のサポートをしている。いや、一応これでもレベル4ですよ? 入学前はどうかと思っ  
ていたが、そうビクビクする必要も無かった。

当麻のおかげで友達も増えたし、あいつには感謝しきれない。

まあ、それはともかく。本来補習を受けなくてもいいのにレベル4ということだけで手伝いをさせられてるんですよ。面倒くさい。

「…ロリコンの上にMかテメェ! 全く救いようがねーな!」

「あつはーッ! ロリ『が』好きなんちゃうでーっ! ロリ『も』好きなんやでーっ!」

「オイそこの二人。そんなに机を高速で飛ばしたものが喰らいたい

のか？」

「「いいえ。滅相も無いです！」」

青い髪のピアス男（通称青ピ）と当麻がギャングァン喚くので脅して黙らせる。

やれやれとその二人をジト目で見ながら補習時間が過ぎていく。

エアリアルブースト  
室素推進。それが俺の能力。

空気中の窒素を操ることができ、それを用いて物を吹っ飛ばしたり、自身の移動等に使うことに特化した能力である。

これを応用することでこっちに向かってくるものの軌道を変えたり、急上昇、急降下、急旋回、加速と移動なら何でもござれな能力だ。

といっても何でも軌道を変えるわけでもなく、多対一だと圧倒的に弱い能力だ。

で、何でこんなことを説明してるかって言うと、

「あつ。いたいた。ちょっと 안타！ 今日という今日は絶対に決着つけてやるから覚悟しろコラア！」

目の前に、とてもお嬢様学校に通う中学生とは思えない口の悪さの戦闘狂がいたからだ。

「いい加減にしてくれよ電撃女……。こっちは補習で疲れてるんだから帰宅していただければ幸いなんですが」

「誰が電撃女よ！ 私には御坂美琴ってちゃんとした名前があるのよ！」

本当によく叫ぶ女だな……。こちらとしては静かな方が好みなんですよ。

「そもそも何で俺を追っかけてるんだよ。俺は電撃放たれながら追われるような趣味は持ってないぞ」

「アンタが私との勝負を断るからいけないのよ！」

理不尽な。そもそも俺とこいつが出会ったのは主に当麻のせいだったりする。

アイツが何時ものように人助けをした。その助けられた奴がコイツ、御坂美琴だった。

どうやら助けられたのが気に食わなかったようで、タッチは電撃という死の鬼ごっこをスタートさせた。

逃げてる途中で俺と会い、逃げる手伝いをしてやった。（進路をふさいだり、当麻を窒素で加速させたり）

その現場を見たコイツが何故か俺にまで電撃を浴びせようとしたので、逃走。

それ以来、見つかったら毎回のように勝負を挑まれ続けている。

……俺が助けなければ良かったのか？

まあ良い。とりあえず勝負を受ければ開放してくれるらしい。

「じゃあ俺とお前が勝負したら、俺を追っかけてこないんだな？」

「そうよ。その気になったんならさっさと始めるわよ！」

「まあ待て。勝負を受ける代わりに、俺が勝負のルールを決めるぞ」

「ハア？ そんなことしたらアンタが有利じゃないの」



「学園都市第三位の超能力者（レベル5）は大能力者（レベル4）に対してハンデもくれないのか？」

「ぐッ……」

この反論でコイツも黙る。当然っちゃあ当然だが。

能力の強さには6段階ある。無能力者（レベル0）がもっとも弱く、超能力者（レベル5）が最も強い。

その超能力者も学園都市に7人しかおらず、コイツはその中の三番目である。

ちなみにこの序列は強さではなく、能力研究が生み出す利益が基準である。

「……良いわ、ルールくらい決めさせてあげるわ」

「そうかそうか。後悔するなよ？」

まあ、このルールだと圧倒的に俺の方が有利だからなあ……。俺のシマじゃ今のノーカンだから、なんて言われるわけにもいかない。

「ルールは鬼ごっこだ」

「鬼ごっこ？」

「そ。能力使用ありで一時間の耐久レース。お前が鬼で俺が逃げる。一発でも俺にダメージを加えられたらお前の勝ち。一時間逃げ切れ

「は俺の勝ち。どうだ？」

「一発でもって、私が少し有利じゃない」

「逆に考えれば、俺は逃げることを考えればいいんだけどな」

「……いいわ。その勝負、乗るわ」

「よっしゃ！ 乗ってくれた。これで俺の勝ちほぼ揺ぎ無い。」

「よし。それじゃ俺は今から逃げるが、お前は5秒後にスタートな。同時じゃ俺が瞬殺される」

「かまわないわ」

「そうか。じゃあな」

「へ？」

今まで逃げるときに飛んで逃げなかったからなあ。これで俺の勝ち  
は決定だ。

「あばよ、とつつあああん！」

コイツがあっけにとられている間に最高速でこの場を離れる。

この時ほど、この能力があつてよかったと思つた日はない。

ちなみにこの後、悔しそうに叫んでいた第三位がいたそうなの。

### 第三話（後書き）

次回はステイル戦かな

#### 第四話（前書き）

一ヶ月も待たせてしまつてごめんなさい。ステイル戦……前半です。  
後半はしばらくお待ちください。

## 第四話

「よつと」

あの電撃女から逃げてからおおよそ1分。俺は窒素を使った加速によつてあつという間に自分の寮に戻ってきた。

俺の部屋はこの寮の七階にあり、隣は当麻が住んでいる。エレベーターが無ければキツイ高さだ。

「ただいまー。誰もいないけど」

くだらない事を言いつつ、部屋に入る。

ちょうど時間は昼過ぎ。高校男子としては、腹の具合がヤバイ。空腹で死にそうだ。

「取り合えずラーメン食ってから行動しますか……」

学園都市で有名なインスタントラーメンを作りつつ、冷蔵庫にあった物のリストを作る。

今思えば冷蔵庫の故障はあの電撃女せいな気がしてきた。

「いやまさか……、まさかなあ……」

そんなわけは無いと否定できるだけの要素がないことに少し、ほんの少しだけ申し訳なく思えてきた。

タイムセールの時間に買い物に行くのは、この寮で生活している奴では当たり前のこと。奨学金がただでさえ少ないので、娯楽にもろくに使えない。

そんな奴らと生活していると、それなりに奨学金をもらえる高能力者の俺でもそんな生活になっていく。

娯楽もゲームだけだし、一つのソフトで何年も遊べる。

まあ、今はそんなことどうでもいい。今本当に大事なことは

「……インデックス？」

当麻の部屋の前に倒れている、今朝見た少女だった。

はは、きっと空腹に耐え切れなくなって此处まで来たんだろうな。そんで腹が減りすぎて此处でぶっ倒れたんだろう？

でも、もしそうだったら、

血がこんなに出てるのはおかしいよな？

「ッ！ おい、しつかりしろ！」

その場から全力でインデックスに近づく。遠目では分からなかったが、背中から出血しているみたいだ。

取り合えず、この出血をどうにかしないといけない。優先順位はそ  
ちの方が上のはずなのに、

「くそッ！ どうしてだよ！ 誰がコイツをこんな目にあわせたんだよ！！」

「ん？ 僕たち、魔術師だけど？」

誰かにぶつけた訳でもない怒りに、誰かが反応した。

「ッ！？」

さっきまで誰もいなかったはずの後方に、身長2mを超える大男が立っていた。

神父の服装をしていながら、派手なアクセサリをつけ、髪は真っ赤に染めて香水の匂いがする。よく見ると右目の下に、刺青なんかしてやがる。しかも、煙草まで吸ってやがった。

「人払いをしていたはずなんだけどね。何かでその効果を防いでいるか、もしくは魔術が利きにくい体質なのか……。できれば後者だと言っことを望むけどね」

「何言ってやがる……？」



訳が分かん。本当に、魔術師なのか……？ 仮に本当に魔術師だとしたら、コイツはインデックスの10万3000冊の魔道書とやらを狙っている……？

「おい、お前はインデックスの魔道書を狙ってるんだよね……？」

「やっぱり彼女から聞いてたのか。そうだよ。それがどうかしたのかい？」

「……あいつは何処にそんな物を持ってやがる？」

そんな量を持てるわけが無い。確かインデックスには魔力が無いとか言ってたから、魔術を使っているって言う線もない。

「彼女に聞いてないのかい？ ここだよ」

奴が自分自身の頭を指差す。頭……？

「彼女は完全記憶能力者……。それを聞いているなら分かるはずだけだね」

「……！ そうか、記憶してるのか！」

それなら全ての辻褄が合う。インデックスが何かを隠してると思っていたが、全部事実なんじゃないか。

「彼女の保持している魔道書は、使いこなすことができれば世界の理をひっくり返すことができるほどの代物なんだ。おとなしく、彼女を渡してくれないな？ 答えによっては、実力行使も厭わないよ」

答えねえ……。もう答えは決まっている。

「そうだな……。あんまり俺は戦うことが嫌いだね。できれば俺に被害が加わらないことを望むさ」

「ふうん……。なかなか賢明な判断じゃ」

「って、今までの俺なら言ってたな」

あのバカの影響かな……。厄介ごとだろうが、お人よしだろうが、介入させてもらいたい。

ふざけた因果で手に入れてしまったこの能力、誰かのために使ってみるのも

「もう誰も傷つけさせねえよ。それが身内だろうが、赤の他人だろうが、な」

悪くない！

「そうか、それは残念だよ。僕にはどういうアレで命を粗末にしようとするのか、分からないけどね」

大男は呆れたように呟く。そして、続ける。

「僕の名はステイル・マグヌス、と、言いたいところだけど、此処は『Fortis931』と名乗らせてもらうよ」

「どっちでもいいだろうが」

「まあそういうなよ。これも魔術師の習慣みたいなもののさ。魔術を使うためには、この魔法名を名乗らなきゃいけないのさ」

「面倒くさいな」

「全く同感だよ。ちなみに日本語では強者、と言ったところか」  
ステイルと名乗った男はそう吐き捨てる。

「まあ、重要なのは魔法名を名乗ることだね、この魔法名はいわゆる」

そう言つて、煙草を投げ捨てる。

「殺し名かな」

そういつた直後、投げ捨てた煙草の炎がより一層、てかあり得ないくらいに燃え上がる。

「あつっ!?!」

「『炎よ』」

そうステイルが呟くと、煙草の炎が奴の掲げた手の上に集まってくる。

その炎は、いわば『メラーマ』クラスの大きさになっていた。

「『巨人に苦痛の贈り物をッ!?!』」

その『メゾーマ』を俺に投げつけてきた……ッ。

ゴウッ!!

「……やりすぎたかな」

目の前に広がる光景を見て、ステイルはそう呟く。

目の前に広がるのは炎の海。直撃すれば人なんて一瞬で蒸発するほどの温度だ。塵すら残らない。

「そんなんじゃ、何回やつても僕には勝てないよ」

そう呟いてこれからのことを考える。

彼女に直撃させなかったが、どう考えても遠回りしないと彼女を回収できない。我ながら面倒なことをしてしまったと、ステイルは思う。

（やれやれ、一回階段で降りるしかないか……）

そう考えてステイルは階段へ向かう      はずだった。

「鬼さんこちらア、手のなる方へってなア!!」

「ッ!？」

ステイルは嫌な予感を感じ、直感的にその場から離れる。その直後、

「スウパイ ズマアキイイイックツ!!」

さつき焼き殺したはずの少年が、外から凄い速度のとび蹴りをかま

していた。

ズツドオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！

外した。当たった場所の鉄の扉が凄く拉げている。

けど痛くはない。普通の人間がこの速度で何かに突っ込んだら、間違いなく死んでいる。

この室素の層のおかげだ。能力に感謝しないとな。

「さアて魔術師さんよオ。覚悟は出来てンだよなア？」

もう迷わない。宣言通り、インデックスを守る為にこの能力を使つてやる。

魔道師だろうがなんだろうが、関係ない。

「お前の人生と同じように、こっから先は行き止まり（デッドエンド）だア！ 死にたくなきゃ、とつと引き返しなア！」

さあ、死合の始まりだ。

#### 第四話（後書き）

後半は出来るだけ早く書きます。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3541v/>

---

とある室素の置き去り（チャイルドエラー）

2011年9月26日02時02分発行